

日本語の雑談における不同意の相互作用

— 「儀礼的不同意」に焦点を置いて—¹

木山 幸子

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

1. はじめに

日常会話において、時には、円滑な対人関係が損なわれる恐れのある発話をする必要が生じる。相手の発話内容に対する「不同意」という言語行為も、相手の考えや解釈を否定することにつながるため、相手を不愉快にさせる可能性を持つ行為である。これまでの不同意の実証研究では、意見を戦わせるべき議論を扱うものが多かった (Holtgraves, 1997; Rees-Miller, 2000; Kangasharju, 2002; Holmes and Stubbe, 2003; Saft, 2004 など)。しかし、不同意には、情報伝達が優先される場面におけるもののみではなく、対人的機能が重視される場面で発せられる儀礼的なものもある。対人的機能が重視される場面には、Coupland (2003) が指摘しているとおり、雑談 (small talk) が挙げられる。本稿では、日常的に何気なく交わされている雑談において見られる儀礼的な不同意の対人的機能に焦点を当てる。

円滑な対人的機能のメカニズムを説明しようとする理論に、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論がある。人間は、他者に認められたい欲求である「ポジティブ・フェイス (positive face)」と、他者に侵害されたくない欲求である「ネガティブ・フェイス (negative face)」を持つといい、ある種の行為は、本質的にフェイスを脅かす行為 (face-threatening act, 以下 FTA) であり、FTA をする際には、フェイスを脅かす度合い (以下、FT 度) に応じて、それを軽減する戦略が採られるということが論じられている。そして、この理論を発展させ、ポライトネスを談話レベルで捉える必要性を主張する宇佐美 (2002 など) のディスコース・ポライトネス理論構想 (以下、DP 理論) では、話し手の戦略と聞き手による解釈の双方を体系化させようとする。DP 理論の核の 1 つは、「無標ポライトネス」としての「基本状態」という概念であるが、これは、「特別にポライトというわけでもなく、あって当たり前であるが、それが欠如したときに初めてポライトでない」と認知される『失礼でない状態』と位置付けられている (宇佐美, 2002 連載第 9 回 31(10): 99)。DP 理論を用いて説明すると、ポライトネスの効果は、話し手と聞き手の「基本状態」の見積もりが一致しているか否かによって決まる。本稿では、これらの理論を枠組みとして、儀礼的不同意の分析を試みる。

¹ 本稿の内容は、2004 年度に東京外国語大学大学院地域文化研究科に提出した修士論文の一部に加筆したものである。

本稿の目的は、日本の若い女性同士の雑談 (small talk) の場面における儀礼的な不同意を、会話者同士の条件を統制した上で談話レベルから分析することによって、人間同士の相互作用がどのようになされているかを探ることである。そのような儀礼的不同意の相互作用の分析を通して、話者たちがとくに意識しなくとも円滑なコミュニケーションを成立させている背景にはどのようなメカニズムが働いているか、示唆を得たい。

本稿における「不同意」という言語行為の定義は、「相手の発話が表す事実あるいは意見について、納得しない、または受け入れていないことを伝える発話 (群)」とする。

2. 方法

実験 (2-1 節)、会話データの文字化作業 (2-2 節)、不同意の抽出 (2-3 節)、分析方法 (2-4 節) の各プロセスを述べる。

2-1. 実験²

Brown and Levinson (1987) は、FT 度を軽減するストラテジーの選択には、「社会的距離 (distance)」、「力関係 (power)」、「ある行為が相手にかかる負荷度 (rank of imposition)」の 3 要因が影響するとしている (Brown and Levinson, 1987: 76)。本稿では、会話参加者同士の社会的距離の差が不同意に与える影響を検討する。

表 1 Brown and Levinson (1987) の FT 度を見積もる公式に従った条件統制

要因	実験の条件
D (distance)	親しい友人同士 / 初対面
P (power)	20 歳～29 歳の女性・学生同士
R (rank of imposition)	雑談場面

D (distance) について、親しい友人同士と初対面の 2 群を設ける。P (power) は、会話参加者同士の力関係に差が生じないように、20 歳代の女性・学生同士に統制する。R (rank of imposition) については、雑談場面という一定の状況に限定することでおおよそ統制されるものとみなす。収集するデータは、親しい友人同士、初対面同士が各 15 会話、合計 30 会話である。60 人の参加者たちは、全員が日本語母語話者で、東京都内の大学に通う学部または大学院の学生である。

実験場所は、協力者以外に誰もいない個室とする。大学の教室、個人の部屋などである。会話の収録には、録音機材としてテープレコーダー、MD レコーダー、録画機材としてデジタルビデオカメラを用いる。まず、実験場所へ協力者を案内し、フェイス・シートの記入

² 会話実験は、2003 年 7 月から 9 月にかけて行った。

を求める。その後、これから行う会話実験について、できるだけ自然にリラックスして話すように、話題は自由であるが実験協力のきっかけや実験者自身については触れないように、時間は15分程度を目安とするが切りのいいところで終わりにするように、会話終了後は、終了した旨を協力者のほうから実験者に知らせるようにというインストラクションを与える³。その後、実験者は録音・録画機材を操作し、退室する。会話終了後には、フォローアップ・アンケート⁴の記入を求める。このとき、質問項目の中には相手のそばでは書きにくい内容もあることを予想し、互いが見えない場所に別れて記入するようにする。収録後にアンケートの回答内容を確認し、分析データとして妥当性を確認できた会話を分析に用いる。

2-2. 会話データの文字化作業

「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)⁵」(宇佐美 2003) によって、収録した会話全部の文字化資料を作成する⁶。文字化資料上では、友人同士の会話参加者を示す IF (intimate female), 初対面の参加者を示す UF (unacquainted female) という記号と、各群の通し番号によって参加者たちを区別する (IF01~IF24, UF01~UF24)。

2-3. 「不同意」の抽出

文字化資料から、1節で定義した「不同意」が現れた発話を抽出する。不同意は、ある発話に対してなされるものであり、不同意の対象となる相手の発話が必ずある。談話レベルから「不同意」の相互作用を分析するために、不同意の対象となる「先行発話」、「不同意」、さらに、不同意に対する相手の「反応」という3つの要素を合わせて抽出する。

³ 会話終了時間について実験者が合図をすると、会話の終結部のやりとりの自然さが保てなくなる可能性があるため、このようにする。

⁴ フォローアップ・アンケートでは、友人同士・初対面に共通して 1) 録音を意識したかどうか、自然に話ができただろうか (5段階評定)、2) 相手の言語行動に対して少し失礼だ、または少し不愉快だと感じるものがあつたかどうか (2択) という質問項目を設ける。2)については、本研究の目的が円滑なコミュニケーションの機能を探るものであることから、その分析資料となる会話において不愉快に感じる部分がないことを確認する必要があるために設けるものである。また、親疎別の項目として、友人同士用には、会話の相手との親しさの程度 (5段階評定)、相手との会話が普段どおりに交わせたかどうか (5段階評定) という項目を設ける。初対面用には、会話相手とは話しやすかつたかどうか (5段階評定)、相手との年齢差をどの程度感じたか (5段階評定) という項目を設ける。

⁵ 本発表で示す会話例は、BTSJを簡略化したものである。

⁶ BTSJによる文字化資料における各記号の意味については、付録を参照されたい。

・「先行発話」 (antecedent)

不同意の対象となった事実や意見を表す発話 (群)。その後になされる不同意の内容に直接関係があると判断したところを範囲とする。

・「不同意」 (disagreement)

相手の発話が表す事実あるいは意見について、納得しない、または受け入れていないことを伝える発話 (群)。

・「反応」 (response)

不同意の直後に、その相手 (「先行発話」を発した話者) によって発せられる 1 発話。

2-4. 分析⁷

まず、すべての分析の前提として、不同意のタイプを 2 分類する。その上で、「不同意」の「反応」についての分析項目を設ける。以下、各項目における分類基準を記す。

2-4-1. 不同意のタイプ: 「実質的不同意」か「儀礼的不同意」か

不同意は、その内容によって性質が異なってくる。不同意は、Brown and Levinson (1987) の指摘では、相手の理解力を難じポジティブ・フェイスを脅かす FTA ということであるが、すべての不同意が FTA であるわけではないことも論じられている。

彼らは、「自己卑下 (self-humiliation)」が、話し手自身のポジティブ・フェイスを脅かす FTA であると指摘する (Brown and Levinson, 1987: 68)。とすると、相手の自己卑下に対して同意することは、相手の自分自身に対するポジティブ・フェイスの侵害をさらに助長し、相手を批判する行為となる。それに対して、この場合の不同意は、相手が自分自身を侵害するポジティブ・フェイスを満たす行為である。つまり、相手の自己卑下に対しては、「不同意」ではなく、「同意」のほうが FTA となると捉えられる。また、話し手自身のポジティブ・フェイスを脅かす FTA として、「ほめの受諾」が挙げられており、ほめられた者は、そのことを軽んじなければならぬように感じるがあると述べられている (Brown and Levinson, 1987: 68)。したがって、相手のほめ言葉に対して「不同意」することは、前述の「相手の理解力を難じる FTA」ではなく、相手を配慮した行為だといえる。

このように、FTA であるとされる不同意と、FTA ではないとされる不同意とは、ポライトネスの観点上対照的な性質を持つと考えられる。そこで、不同意の先行発話の内容によって、すべての不同意を以下の 2 つに分類する。

⁷ 分析の信頼性を、第一認定者 (筆者) と第二認定者の判定の一致率 (Cohen's Kappa: κ , 詳細は Bakeman and Gottman, 1986) によって確認している。

- ・「実質的不同意」 : 不同意の対象となる先行発話 (群) が、相手に対するプラス評価、または自己に対するマイナス評価ではない場合
- ・「儀礼的不同意」 : 不同意の対象となる先行発話 (群) が、相手に対するプラス評価、または自己に対するマイナス評価である場合

2-4-2. 不同意の反応: 「受諾」か「不同意」か「発展」か「転換」か

不同意を含む話者双方の相互作用の大まかな流れをつかむために、不同意に対してどのような反応がなされているかを検討する。以下の4つの項目を設け、不同意の直後の相手の1発話の内容を大別してみる。

- ・「受諾」 : 相手の不同意に異議を唱えないもの (積極的に同意するもののみではなく、単にあいづちを返す場合、反応を保留するような場合も含む)
- ・「不同意」 : 相手の不同意に対して、再び不同意するもの (新たな不同意として分析の対象となる)
- ・「発展」 : 相手の不同意の内容について、コメントを加えたり、相手にさらなる説明を要求したりして、話を広げるもの (不同意の話題がそこで終らない)
- ・「転換」 : 不同意の内容には触れずに、即座に話題を転換させるもの (相手の不同意について反応を加えない)

儀礼的不同意に関しては、不同意の発端となった先行発話が「相手へのプラス評価」であったのか、「自己に対するマイナス評価」であったのかを別個にした上で分類する。「先行発話」の話者と「反応」の話者は同一人物であるが、「先行発話」をした話者が、不同意を受けて、さらにどのような反応をするのか詳しく見るためである。

3. 結果と考察

会話データの基本的情報を示した後で、「不同意」と「反応」について設けた分析項目ごとに、親疎差があるかを見る。

3-1. 基本情報

収録した会話の状況と、そこから抽出した「不同意の連鎖」の結果について、それぞれ、平均値、標準偏差、総数を示す。各項目において、親疎の群の間の平均値差が有意であるか調べるために t 検定を行った。

表2 会話の状況

	会話数	会話時間 (単位: 分)			不同意の出現頻度		
		平均	標準偏差	合計	平均	標準偏差	合計
友人同士	15	20.1	4.6	303	8.9	5.0	134
初対面	15	21.4	5.7	353	9.3	7.4	140
全体	30	20.8	5.1	656	9.1	6.2	274

表2の通り、会話時間(文字化時間と一致)については、全30会話の総計が約656分、総平均が約20.8分($SD=5.1$)であった。親疎の群ごとに見ると、友人同士15会話の合計が約303分、1会話の平均が約20.1分(最大約27分、最小約12分, $SD=4.6$)、初対面15会話の合計が約353分、1会話の平均が約21.4分(最大約31分、最小約15分, $SD=5.7$)であった。

「不同意」の頻度は、全30会話中274回(1会話の総平均が9.1回, $SD=6.2$)であった。群ごとにみると、友人同士では15会話中134回(1会話の平均が8.9, $SD=5.0$)、初対面では15会話中140回(1会話の平均が7.4, $SD=7.4$)であった。両者の平均値に有意な差はなく、親疎とも、同程度の不同意が現れていた($t=-.173, df=28, p=.864$)。

3-2. 不同意の性質の結果

分析の前提として、不同意の性質を「実質的」なもの、「儀礼的」なものに分類した。結果は図1の通りである。

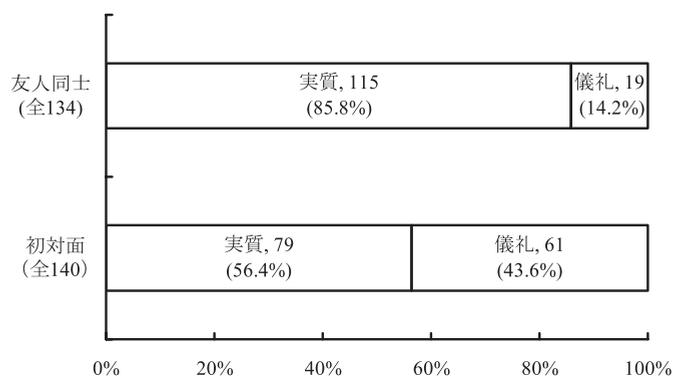


図1 不同意の性質: 「実質的不同意」と「儀礼的不同意」の内訳

友人同士の134例の不同意のうち、実質的不同意が115例(85.8%)、儀礼的不同意が19例(14.2%)であった。初対面の140の不同意のうち、実質的不同意が79例(56.4%)、儀礼的不同意が61例(43.6%)であった。この比率の差は有意であった($\chi^2 = 28.613, df = 1, p = .000$)。友人同士においては、実質的不同意の占める比率が圧倒的に高かったのに対して、初対面においては実質的不同意と儀礼的不同意の比率がほぼ同程度である。不同意自体の

頻度には親疎差はないものの、不同意のタイプ別に見ると、顕著な親疎差があることが分かった。

「実質的不同意」とは対照的に、本研究で「儀礼的不同意」と定義したものは、FTA には当たらない。DP 理論では、「特別にポライトというわけでもなく、あつて当たり前であるが、それが欠如したときに初めてポライトでないと認知される『失礼でない状態』(宇佐美 2003, 連載第 10 回 31 (11): 99)」としての「無標ポライトネス」が、理論の中核となっている。この儀礼的不同意の状態も、友人同士、初対面それぞれにおける「無標ポライトネス」を成していると捉えられる。親しい友人同士の会話では、会話者同士の「社会的距離 (distance)」が小さいため、それほど多く「儀礼的不同意」のやりとりを交わす必要がなく、またそのような状態が「あつて当たり前」の無標ポライトネスとなっている。それに対して初対面の会話では、会話者同士の「社会的距離 (distance)」が大きいため、その分「儀礼的不同意」のやりとりを多く交わす必要があり、そのような状態が「あつて当たり前で失礼のない」無標ポライトネスを成すという説明ができる。

例えば、初対面では、次の会話例 1 のような儀礼的不同意が見られる。

会話例 1. 典型的な「儀礼的不同意」の例

初対面[10]: 自己紹介直後で

- 50 UF19 なんか(はい)、若いですね、<なんか…>{<}<笑いながら>。⁸
51 UF20 <いや>{>}、若くないです。
52 UF20 幼いだけ<です>{<}<笑いながら>。
53 UF19 <いや>{>}、そうですか<笑いながら>。[1]

自己紹介で互いの学年や年齢に見当がついた後、UF19 は相手が若く見えるとほめている (ライン 50)。それに対して UF20 は、自分は若くはないと不同意する (ライン 51, 52)。この会話例に限らず、初対面の会話で、相手の外見が若く見えるとほめ、それに対して儀礼的不同意をするというパターンが散見された。初対面で、とりわけ会話のはじまったばかりの時点では、互いの接点が見つからないため、このような無難なやりとりを交わすのだろう。会話導入部の自己紹介後のやりとりとして、このパターンはひとつの典型を成していると捉えられる。リーチ (1983, 池上他訳 1987: 197-200) は、自己の賞賛を最小限にするという原則を破ることは、自慢という社会的違反を犯すことになる」として、「謙遜の原則」をポライトネスのひとつに挙げている。相手から若いとほめられたことに対して儀礼的に不同意するというやりとりが、20 代女性日本語母語話者の初対面の雑談において、社会通念に則った対人関係上の潤滑油的な機能を果たすものと考えられる。とくに共通の話題の

⁸ 以下、会話例において、「不同意」とコーディングした部分を下線で示す。

ない初対面の会話の導入部では、実質的な内容はなく相手の感情に訴えるようなやりとりの中で儀礼的な不同意が起こっているということが分かった。このような初対面の導入部における儀礼的不同意は、円滑な対人関係を構築する機能を果たし、よく知らない相手との会話を維持していく素地をつくっているようである。

3-3. 儀礼的不同意に対する反応について

不同意に対する「反応」の内容に関する分析結果を示す。

まず、「先行発話」が「相手に対するプラス評価」であった場合の結果を図2に示す。

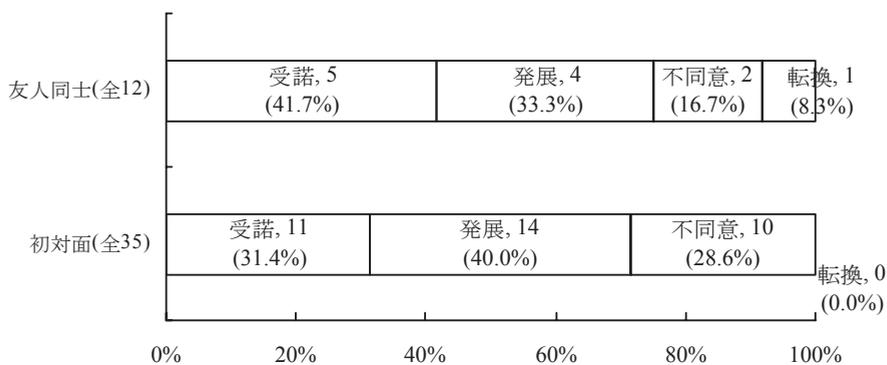


図2 不同意の反応: 「儀礼的不同意」に対する反応の内訳
「先行発話」が「相手に対するプラス評価」であった場合

「先行発話」が「相手へのプラス評価」であった場合、友人同士の儀礼的不同意に対する反応において、「受諾」が5例(41.7%)、「発展」が4例(33.3%)、「不同意」が2例(16.7%)、「転換」が1例(8.3%)であった。初対面の儀礼的不同意に対する反応においては、「受諾」が11例(31.4%)、「発展」が14例(40.0%)、「不同意」が10例(28.6%)、「転換」が0(0.0%)であった。親疎とも、「受諾」と「発展」の占める割合が比較的大きく、ついで「不同意」となり、「転換」は非常に少なかった。この比率に有意な差はなかった($\chi^2=3.792$, $df=3$, $p=.285$)。

それに対して、「先行発話」が「自己に対するマイナス評価」であった場合、有意な親疎差が見られた。

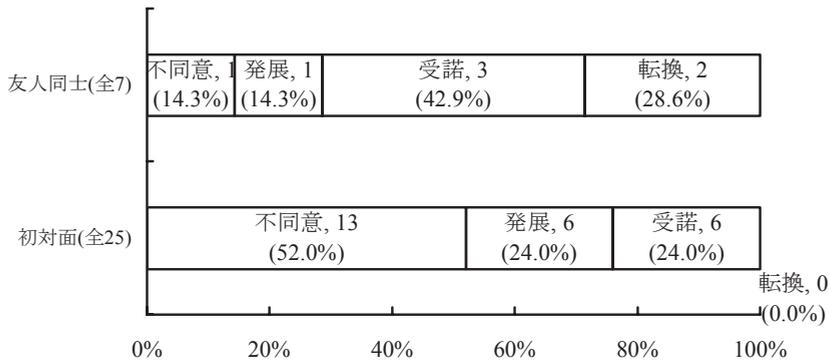


図3 不同意の反応: 「儀礼的不同意」に対する反応の内訳
「先行発話」が「自己に対するマイナス評価」であった場合

「先行発話」が「自己に対するマイナス評価」だった場合には、友人同士の儀礼的不同意に対する反応は、「受諾」が3例(42.9%)、「転換」が2例(28.6%)、「不同意」と「発展」がともに1例(14.3%)であった。初対面の儀礼的不同意に対する反応は、「不同意」が13例(52.0%)、「発展」と「受諾」がともに6例(24.0%)、「転換」が0(0.0%)であった。この比率の差は有意であった($\chi^2=9.481, df=3, p=.024$)。初対面において、儀礼的不同意に対する反応として「不同意」の占める割合が大きいという点が特徴的である。

このように、「自己に対するマイナス評価」が先行発話である場合の儀礼的不同意に対する反応について、親疎によって異なる結果が示された。初対面では、儀礼的不同意に対する反応が儀礼的不同意であるのに対し、友人同士では、儀礼的不同意に対する反応は儀礼的不同意ではなく、実質的な内容を話していた。友人同士の会話では、そもそも儀礼的不同意が起こることは少ない上に、たとえ先行発話が「自己に対するマイナスの評価」だった場合の儀礼的不同意が起きたとしても、それに対して再び不同意をするというような、初対面の会話のようなやりとりはまず行われないうことが示された。初対面・友人同士それぞれの「基本状態」が異なっていることが分かる。

ここで、「自己に対するマイナス評価」が先行発話だった場合の、儀礼的不同意に対する反応について、友人同士・初対面それぞれの会話例を見てみる。

会話例2は、友人同士における例である。

会話例2. 友人同士の会話における儀礼的不同意のやりとり

友人同士[10]: 部活の合宿で検定試験が予定されている

161 IF20 ねほんとさー、(うん)あたし合宿で、(うん)1級とか受けるの、む、無理なんだけ
ど<笑い>。

- 162 IF19 受けようよー。
- 163 IF20 ほんと、怖いんですけど、あれ>{<}。
- 164 IF19 <受けようよー>{>}。
- 165 IF19 大丈夫=。
- 166 IF20 =あ、これ、「人名4姓」さんに。[IF19にお金を渡している] 転換

IF20 は、部活の合宿で検定試験を受けるのは無理だと述べ、不安を見せている (ライン 161, 163)。それに対して IF19 が「大丈夫」だといって不同意をしている (ライン 164, 165)。この不同意に対する反応はライン 166 の発話であるが、この内容は、「人名4」に借りていたお金を返すよう UF19 に言付けているものであり、先の儀礼的不同意の内容をそれ以上続けていない。

次の会話例3は、初対面の会話におけるやりとりである。

会話例3. 初対面の会話における儀礼的不同意のやりとり

初対面[8]: UF15 は、中国に留学した当初、まったく中国語を話せなかったと話す

- 195 UF16 でも私の場合は、ほんとに最初中国語だめだったんで<笑いながら>,,
- 196 UF15 あそうなんですか?。
- 197 UF16 はい。
- 198 UF16 あんま勉強したという程度じゃなかったの、あの一、もう1度やりなおそう
っていう、勢いで,,
- 199 UF15 んー。
- 200 UF16 行ったような<感じで>{<}。
- 201 UF15 <強い>{>}ですね<笑いながら>。
- 202 UF16 いえいえ。
- 203 UF16 もうちょっと勉強してこいっていう話なんですけど、本当なら<2人笑いなが
ら>。
- 204 UF16 ほんとそう、ほんとそうなんですよ<笑いながら>。 1
- 205 UF15 そんなこと言ったら、私とかほんと、だめですよ<笑いながら>。 2
- 206 UF16 いえいえ、ほんとに、ひとつ、しゃべれる人はすごいと思います<笑いながら
>。
- 207 UF16 <英語絶対必要だし>{<}。 3
- 208 UF15 <いえいえ、卒論が、書ける>{>}かどうか悩みで。 4
- 209 UF16 あ、卒論何書くんですか?。
- 210 UF15 あの、帰国子女の英語保持の動機付けについてなんですけど。
- 211 UF16 え、帰国子女の何の動機?。
- 212 UF15 英語の能力。

UF16 は、中国へ留学した当初、まったく中国語が話せなかったという。それを UF15 は、「強い」といって UF16 の度胸の良さをほめている (ライン 201)。この先行発話に対して、UF16 は、そうではなく、もう少し勉強してから行くべきだったと儀礼的不同意をする (ライン 203, 204)。これに対する UF15 の反応が不同意であり (ライン 205)、この後も不同意が 2 回起きる。ライン 206 と 207 で、UF16 は英語圏からの帰国子女である UF15 をほめ、続くライン 208 では、UF15 は卒論が書けないからだめだと述べている。こうしてライン 202 から 208 まで 4 回の儀礼的不同意が交わされた後、UF16 が、相手が不同意の材料として用いた卒論という話題を引き出したのをきっかけとして、儀礼的同意のやりとりが終わっている。それ以降は、UF15 の卒論の内容という実質的なやりとりに移行する。このように、初対面の会話で、儀礼的同意が何度も続けて起きるといふ例が見られた。

日本社会のコミュニケーション・パターンについて、リーチ (1983, 池上他訳, 1987) は、次のように指摘している。

日本の社会では、そしてもっと特定的には日本人の女性の間では、謙遜の原則の力は英語圏社会における通常の場合より一層強力である。英語圏社会では、お世辞を否認し続けることより、お世辞を (例えば、それを言ってくれたことを話し手に感謝することによって) 「丁寧に」受け入れることのほうが、慣例的により丁寧であろう。(リーチ著 1983, 池上他訳 1987:190)

本研究の結果からも、相手が謙遜したことに対しては不同意し、またそれに対して再び不同意をするというパターンが浮かび上がってき、それが初対面同士の会話の基本状態を成していることが示された。ただし、リーチは日本人の女性の間で謙遜の原則が強力に働くと指摘しているが、本研究の 20 代女性同士の雑談における結果と照らし合わせると、それは初対面の会話においてのみ言えることである。友人同士では「不同意」が続くことは少なかった。したがって、友人に向かってこのパターンを展開した場合、相手はよそよそしく振舞われたと感じ、対人関係も損なわれかねない。

友人同士の会話では「受諾」が半数近くの比率を占めており、このように振舞うことが友人同士における「無標ポライトネス」を成しているといえる。20 代の女性の日本語母語話者は、友人同士の雑談をする際は、相手が自分をマイナスに評価したとしても不同意をし続けないということ、無意識的にも見積もっているということである。もし不同意をしたなら、聞き手が持っているであろう「無標ポライトネス」の見積もりから逸脱することになるわけだから、場合によってはよそよそしいというマイナス・ポライトネス効果を生むだろう。

儀礼的同意に対する反応の仕方は、文化によって異なるコミュニケーション・パターンの 1 つといえるかもしれない。今後、日本語以外の言語において、また、非母語話者による日本語のデータとの比較を試みたい。

4. おわりに

日本語の雑談における不同意の相互作用の分析を通して、対人配慮行動としてのポライトネスの効果を考えるためには、1発話レベルからのみではなく、談話レベルという視点を取り入れること、話し手のみではなく聞き手からの働きかけに注目することが不可欠であることを示した。本稿で試みた、どのような場合に儀礼的不同意をするか、儀礼的不同意に対してどのような反応をするかなどといった知見は、外国語教育の問題を考える際にも有益な助けとなるだろう。Usami (2004: 268) で指摘されている通り、日本語の非母語話者にとっては、日本語の母語話者同士が何気なく交わしている会話の談話レベルの特徴は捉えにくく、習得が難しい課題である。このような問題に取り組むために、今後も、分析方法を洗練させ追試検証していきたい。

付記

- ・ 分析対象である自然会話データの収集にあたって、実験協力者となってくださった方々、また、協力者をご紹介くださった方々に、心より御礼を申し上げます。
- ・ 本研究で用いた自然会話の文字化資料は、次のプロジェクトの一環として、複数の作業によるチェックを経て作成されたものです。

東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
言語教育学班 談話班 (日本語) 2003 年度～2004 年度研究プロジェクト
「談話データ分析に基づく言語運用についての基礎的研究」 (責任者: 宇佐美まゆみ)

引用文献

- Bakeman R. and Gottman J. M. 1986: *Observing interaction: an introduction to sequential analysis*. New York: Cambridge University Press.
- Brown, P. and Levinson, S. C. 1987: *Politeness—Some universals in language usage*. Cambridge [Cambridgeshire]; New York: Cambridge University Press.
- Coupland, J. 2003: Small talk: social functions. *Research on language and social interaction*, 36(1), 1-6.
- Holmes, J. and Stubbe, M. 2003: Doing disagreement at work. *Australian journal of communication*, 30(1), 53-77.
- Hortgraves, T. 1997: Yes, but... Positive politeness in conversation arguments. *Journal of language and social psychology*, 16(2), 222-239.
- Kangasharju, H. 2002: Alignment in disagreement: forming oppositional alliances in committee meetings. *Journal of Pragmatics*, 34, 1447-1471.
- Rees-Miller, J. 2000: Power, severity, and context in disagreement. *Journal of pragmatics*, 32, 1087-1111.

- Saft, S. 2004: Conflict as interactional accomplishment in Japanese: arguments in university faculty meetings. *Language in Society*, 33, 549-584.
- Usami, M. 2004: Why do we need to analyze natural conversation data in developing conversation teaching materials? –some implications for developing TUFSS language modules-. *Linguistic informatics III: The first international conference on linguistic informatics –state of the art and the future-*. 21st century COE: Center of Usage-Based Linguistic Informatics Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies (TUFSS), 263-278.
- 宇佐美まゆみ 2002: 「連載ポライトネス理論の展開」『月刊言語』31(1) -31(5)、31(7) -31(13).
 —— 2003: 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C(2) (研究代表者: 宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, 4-21.
- 木山幸子 2005: 「日本語の雑談における不同意の相互作用」, 東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文.
- リーチ, G. N. 著, 池上嘉彦・河上誓作訳 1987: 『語用論』, 紀伊国屋書店. (G. N. Leech 1983 *Principles of pragmatics*. London; New York: Longman.)

付録

以下に, BTSJ で用いられている主な記号の説明を抜粋しておく。

- 。 : 1 発話文が終了したときに必ず付せられる。
- ,, : 当該ラインで 1 発話文が終了していないときに付せられる。
- == : 改行される発話と発話の間(ま)が, 当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか, まったくないこと(ラッチング)を示すために付せられる。
- < >{<} : 2 人の話者による同時発話の部分に付せられる。重ねられた発話に「< >{<}」, 重ねた方の発話には「< >{>}」を付す。
- 【 【 】】 : 第 1 話者の発話文が完結する前に, 途中に挿入される形で, 第 2 話者の発話が始まり, 結果的に第 1 話者の発話が終了した場合に付せられる。第 1 話者の発話文の終わりに「【【】」, 第 2 話者の発話文の冒頭に「【】」を付す。
- [] : 実際の発話ではない文脈の情報。その発話がなされた状況が分かるように, 必要に応じて記す。音声上の特徴も, 特記する必要があるものなどを記す。
- () : 短く, 特別な意味を持たない「あいづち」は, 相手の発話中の最も近い部分に, () にくくって入れる。

(宇佐美, 2003: 8, 14-15 より)

The interaction of disagreement in Japanese small talk – focusing on “courteous disagreement”

Sachiko KIYAMA

(Ph D Candidate, Tokyo University of Foreign Studies)

Summary

This is a quantitative analysis of the interaction of disagreement in terms of politeness in small talk among young native Japanese women. In everyday conversation, it is often unavoidable to do the act which might jeopardize the relationship between the speaker and the addressee. Disagreement by its nature is also an act that may give the addressee an unpleasant feeling. Most of the empirical studies on disagreement have been made on the discussion situation (e.g. Holtgraves, 1997; Rees-Miller, 2000; Kangasharju, 2002). But disagreement is not limited within the sphere of information transactions. It often occurs just as a courtesy in an interpersonal transaction. This is especially so in the case of small talk. As Coulpand (2003) points out, interpersonal function is much more important in small talk than the information to be conveyed. This paper focuses on this interpersonal function of courteous disagreement in everyday casual conversation, small talk.

The participants were sixty Japanese female students in their twenties. Fifteen conversations were recorded and transcribed between friends and another fifteen between strangers. The transcribed data from both contexts was then compared quantitatively. Distinction was made between "substantial disagreement" to assert one's opinion or fact and "courteous disagreement" when the antecedent utterance(s) set as the object of disagreement is the plus evaluation to an interlocutor, or the minus evaluation to self.

The results indicated that substantial disagreement occurred in eighty-six per cent of cases of disagreement observed in conversations between friends, but in only fifty-six per cent of cases in conversations between people meeting for the first time. Courteous disagreement, on the other hand, occurred in around only fourteen per cent of cases in conversations between intimates, but in forty-four per cent of situations between strangers ($p < .001$). These results indicate that "courteous disagreement" occurs more between strangers than between friends.

Further analysis of the "substantial"/"courteous" dichotomy revealed marked variation. If we take

courteous disagreement only, its responses are mainly disagreements between strangers. In contrast, it occurs very seldom between friends ($p < .05$).

As shown in this paper, the knowledge such as to objects of courteous disagreement or responses to courteous disagreement may be of a certain practical value in the field of foreign language teaching. A foreseeable extension of this research would be to include comparisons with Japanese and other languages.